



801



801

1001

桃子 久

































ホテル石炭

石炭ホテル

















国指定天然記念物

いぬ ぼう さき はく あ き せん かい たい せき ぶつ 犬吠埼の白亜紀浅海堆積物

中生代白亜紀は、今から約1億4400万年～6500万年前の恐竜やアンモナイトがいた時代です。この犬吠埼灯台下周辺の砂岩は、その中の約1億2000万年前に堆積した地層(堆積物)であると考えられています。

地層を観察すると、当時このあたりが浅い海だったことがわかります。地層に見える模様のリップルマーク(写真1)やハンモック状斜交層理(写真2)は、当時の海の波や流れが海底の砂を動かしてできたものです。海底に残された生物の活動痕の化石である生痕化石(写真5)もみられます。また、この海に生息していたアンモナイトやトリゴニア(三角貝)の化石や、海岸付近の植物の化石も地層の中から発見されています。

このように、この地域は白亜紀の日本の様子を知る上で重要な場所です。

その保護のため、文化財保護法により様々な規制等を設けていますので、ご注意ください。





グランドホテル磯屋



人間の歴史と地球の歴史

犬吠埼という地名のいわれには義経の伝説がある。兄頼朝に追われて奥州へのかれる途中鉾子へ立ち寄った義経は、その愛犬を残して去ったが、主人をしたらうあまり七日七夜岩頭で吠え続けたところから犬吠埼と名づけられたと言ひ伝えられています。

また義経が立てこもったと言われる犬若の千騎ヶ岩附近にある犬岩は、死んだ愛犬が岩に化したものなどの伝説も残っています。

ところでこの犬吠埼を形成している岩石は、地質学上では中世代白亜紀層に属するものとされているので、少なくとも七千万年から一億年以上の風雪に耐えてきた、いるものと言うことになります。

鉾子市

ここは**犬吠園地**です。

Inubo Park



犬吠埼灯台のランプ



犬吠埼灯台



白亜紀浅海地積物

犬吠埼は、水郷筑波国定公園内の風光明媚な景勝地で、関東の最東端に位置し、山頂や離島を除き、日本で一番早く初日の出が拝めます。

その突端にそそり立つ犬吠埼灯台は、英国人R・H・ブラントンの設計により作られた西洋型第1等灯台で、明治7年、日本で24番目に点灯されました。地上31mのレンガ作りの構造物で、自然美と灯台のおりなす風景は、観光銚子のシンボルです。

平成10年には「世界の歴史的灯台100選」に選ばれました。

犬吠埼周辺は、景勝地のため、文人、歌人などの来遊が多く、高浜虚子句碑、佐藤春夫詩碑、尾張穂草歌碑などの文学碑があります。













犬吠埼の崖地植物群落

海岸の岩場や崖地はつねに強い潮風にさらされ、土壌が乏しいので特殊な形や性質をもった植物しか生息できません。犬吠埼の一带にはそのような植物がたくさん集まっています。

ここにあるハマサワヒヨドリやマルバノハマシャジンは、もともと内陸のサワヒヨドリやツリガネニンジンと同じ種類ですが、まったく別物ではないかと思うほどの特色があります。ほかにもこのような例（ノアザミ、タンポポなど）はありますが、まだ十分に研究が尽くされていません。またイソギク、ソナレムグラは、ここが北限地です

千葉





















小川芋銭 句碑

OGAWA USEN KUHI

ちょう し なた ちょう とん
銚子灘朝暎

たい かい と づ こ はつ ひ で
大海を 飛びいつる如と 初日の出

う せん し
芋銭子



う せん ほんみょう しげ きち とく い が
芋銭は(本名・茂吉)は、特異な画
ふう も し しゃだつ はい
風を持って知られ、ことに洒脱な俳
が ひろ あいこう しょうわ ねん
画は広く愛好されました。昭和13年、
さい た かい ばん ねん あし
71歳で他界しましたが、晩年は海
か じま べつそう ちょうこうあん か す
鹿島の別荘「潮光庵」を借りて住み、
かいとうしゅうらい うんらん えんすい かっ ば ひやくず
「海島秋来」「雲巒烟水」「河童百図」
めいさく えが ひ ぶん く
などの名作を描きました。碑文の句
げんざい てんのう へい か せいたん とき
は、現在の天皇陛下がご生誕の時、
ち よろ よ
この地でその喜びを詠んだものです。
しょうわ ねんちようし がく どう かい し ぜん せき
昭和34年銚子琴堂会により自然石
おおいわ きざ
の大岩に刻まれました。



















竹久夢二 詩碑

TAKEHISA YUMEJI SHIHI

宵待草

までど暮らせど来ぬ人を

宵待草のやるせなさ

今宵は 月も出ぬさうな

夢二



明治末期から大正にかけて活躍した叙情画家であり詩人の竹久夢二が、海鹿島海岸にひっそりと咲き乱れる宵待草によせて、わが身の悲恋をうたったものです。

この詩の一節と肖像を刻んだ文学碑が作詞の地である海鹿島高台に昭和46年に建立されました。

